

天守物語

泉鏡花



時 不詳。ただし封建時代——晩秋。日没前より深更にいたる。

所 播州姫路。白鷺城の天守、第五重。

登場人物

天守夫人、富姫。(打見は二十七八) 岩代国猪苗代、
亀の城、亀姫。(二十ばかり) 姫川図書之助。(わか
き鷹匠) 小田原修理。山隅九平。(ともに姫路城主
武田播磨守家臣) 十文字ヶ原、朱の盤坊。茅野ヶ原
の舌長姥。(ともに亀姫の眷属) 近江之丞桃六。(工
人) 桔梗。萩。葛。女郎花。撫子。(いずれも富姫の
侍女) 薄。(おなじく奥女中) 女の童、禿、五人。武
士、討手、大勢。

舞台。天守の五重。左右に柱、向つて三方を廻廊まわりろうか下のごとく余して、一面に高く高麗こうらいべりの畳を敷く。紅くれなゐの鼓の緒、処々に蝶結びして一条ひとすじ、これを欄干のごとく取りまわして柱に渡す。おなじ鼓の緒のひかえづなにて、向つて右、廻廊の奥に階子はしごを設く。階子は天井に高く通ず。左の方廻廊かたの奥に、また階子の上下の口あり。奥の正面、及び右なる廻廊の半ばより厚き壁にて、広き矢狭間やざま、狭間はざまを設く。外面は山岳の遠見とおみ、秋の雲。壁に出入りの扉あり。鼓の緒の欄干外そと、左の一方、棟薨むながわら、並びに樹立こだちの梢こすえを見す。正面おなじく森々しんしんたる樹木の梢。

めのわらわ

女童三人——合唱——

ここはどここの細道じゃ、細道じゃ、

天神様の細道じや、細道じや。

——うたいつつ幕開く——

侍女五人。桔梗ききよう、女郎花おみなえし、萩はぎ、葛くず、撫子なでしこ。各名おのおのにそぐえる

姿、鼓の緒の欄干に、あるいは立ち、あるいは坐いて、手に

手に五色ごしきの絹糸を巻きたる糸柀きんしよくに、金色銀色の細き棹さおを通

し、糸を松杉の高き梢くぐを潜くぐらして、釣つりの姿す。

女童三人は、緋ひのきつけ、唄いづく。——冴さえて且つ寂

しき声。

少し通して下さんせ、下さんせ。

ごようのないもな通しません、通しません。

天神様へ願掛けに、願掛けに。

通らんせ、通らんせ。

唄いつつその遊戯をす。

薄、天守の壁の裡うちより出づ。壁の一劃かくはあたかも扉のごとく、自由に開く、この婦おんなやや年かき。鼈甲べっこうの突通し、御殿

奥女中のこしらえ。

薄 鬼灯ほおずきさん、蜻蛉とんぼさん。

女童一 ああい。

薄 静しずかになさいよ、お掃除が済んだばかりだから。

女童二 あの、釣を見ましようね。

女童三 そうね。

いたいけに頷うなずきあいつつ、侍女等の中に、はらはらと袖を交まじう。

薄 (四辺あたりを眺みまわす) これは、まあ、まことに、いい見晴しでござ

いますね。

葛 あの、猪苗代いなわしろのお姫様がお遊びにおいででございますから。

桔梗 お鬱陶うつとしかろうと思ひまして。それには、申分のござい
ませんお日和でございますし、遠山はもう、もみじいたしま
したから。

女郎花 矢狭間も、物見も、お目触りな、泥や、鉄の、重くる
しい、外そと困がこいは、ちよつと取払つておきました。

薄 成程、成程、よくおなまけ遊ばす方たちにしては、感心に
お気のつきましたことでございます。

桔梗 あれ、人ぎきの悪いことを。——いつ私たちがなまけま
したえ。

薄 まあ、そうお言いの口の下で、何をしておいでだろう。二
階から目薬とやらではあるまいし、お天守の五重から釣をす
るものがありますかえ。天の川は芝を流れはいたしません。
富姫様が、よそへお出掛ひまけ遊ばして、いくら間ひまがあると申し

たつて、串戯じょうだんではありません。

撫子 いえ、魚を釣るのではありません。

桔梗 旦那様の御前おまえに、ちようと活いけるのがございませぬから、

皆みんなで取みつて差上げようと存ぞじまして、花を……あの、秋草を釣りますのでございますよ。

薄 花を、秋草をえ。はて、これは珍しいことを承ります。そして何かい、釣れますかえ。

女童めのわらわの一人の肩に、袖でつかまつて差覗さしのぞく。

桔梗 ええ、釣れますとも、もつとも、新発明でございます。

薄 高慢なことをお言いでない。——が、つきましては、念のため伺まいますがお用いになります。……餌えさの儀でござんすがね。

撫子 はい、それは白露でございますわ。

葛 千草八千草秋草が、それはそれは、今頃は、露を沢山たんと欲しがるのでございますよ。刻限も七つ時、まだ夕露も夜露もないのでございますもの。(隣を視るみ) 御覧なさいまし、女郎花さんは、もう、あんなにお釣りなさいました。

薄 ああ、ほんにねえ。まったく草花が釣れるとなれば、さて、これは静しずかにして拝見をいたしましょう。釣をするのに饒舌しゃべつては悪いと云うから。……一番いちばんだまっておとなしい女郎花さんがよく釣った、争われないものじゃないかね。

女郎花 いいえ、お魚とは違いますから、声を出しても、唄いまして構いません。——ただ、風が騒ぐと下可いけませんわ。……餌の露が、ぱらぱらこぼれてしまいますから。ああ、釣れませんでした。

薄 お見事。

と云う時、女郎花、棹さおながらくるくると棹を巻戻す、糸につれて秋草、欄干かたわらに上り来る。さきに傍かたわらに置きたる花ともにも、女童の手に渡す。

桔梗 釣れました。(おなじく糸を巻戻す。)

萩 あれ、私も……

花につれて、黄と、白、紫の胡蝶こちょうの群むれ、ひらひらと舞上る。

葛 それそれ私も——まあ、しおらしい。

薄 桔梗さん、棹をお貸しな、私も釣ろう、まことに感心、おつだことねえ。

女郎花 お待ち遊ばせ、大層風が出て参りました、餌が糸にとまりますまい。

薄 意地の悪い、急に激しい風になったよ。

萩 ああ、内廊うちぐるわの秋草が、美しい波を打ちます。

桔梗　そう云ううちに、色もかくれて、薄すすぎばかりが真白まっしろに、水のように流れて来ました。

葛　空は黒雲くろくもが走りますよ。

薄　先刻さつきから、野も山も、不思議に暗いと思つていた、これは

酷ひどい降りになりますね。

舞台暗くなる、電光閃ひらめく。

撫子　夫人おくさまは、どこへおいで遊ばしたのでございますえ。早く

お帰り遊ばせば可ようございますね。

薄　平時いつものように、どこへとも何ともおつしやらないで、ふい

とお出ましになつたもの。

萩　お迎いにも参られませぬえ。

薄　お客様、亀姫様のおいででの時刻を、それでも御含みでいらつしやるから、ほどなくお帰りでござんしょう。——皆さんが、

御心入れの御馳走、何、秋草を、早くお供えなさるが可いね。

女郎花 それこそ露の散らぬ間に。——

正面奥の中央、丸柱の傍に鎧櫃を据えて、上に、金色の眼、
しろがねの牙、色は藍のごとき獅子頭、萌黄錦の母衣、朱の渦
まきたる尾を装いたるまま、莊重にこれを据えたり。

——侍女等、女童とともにその前に行き、跪きて、手に手
に秋草を花籠に挿す。色のその美しき蝶の群、齊く飛連れ
てあたりに舞う。雷やや聞ゆ。雨来る。

薄 (薄暗き中に) 御覧、両眼赫耀と、牙も動くように見える
こと。

桔梗 花も胡蝶もお氣に入つて、お嬉しいんでございませう。
時に閃電す。光の裡を、衝と流れて、胡蝶の彼処に流るる
処、ほとんど天井を貫きたる高き天守の棟に通ずる階子。

——侍女等、飛ぶ蝶の行方につれて、ともに其方そなたに目を注ぐ。

女郎花 あれ、夫人おくさまがお帰りでございますよ。

はらはらとその壇もとの許もとに、振袖、詰袖、揃もすそつて手をつく。階子の上より、まず水色の衣きぬの褌つま、裳もすそを引く。すぐに蓑みのを被かぎたる姿見ゆ。長たけなす黒髪、片手に竹笠、半おもてば面おもてを蔽おほいたる、美しく気高き貴女きじよ、天守夫人、富姫。

夫人（その姿に舞すがい縋すがる蝶々の三つ二つを、蓑を開いて片袖すがに受く）出迎えかい、御苦労だね。（蝶に云う。）

——お帰り遊ばせ、——お帰り遊ばせ——侍女等、口々に言迎う。——

夫人 時々、ふいと気まかせに、野分のわきのような出歩で行きあるきを、……ハタと竹笠を落す。女郎花、これを受け取る。貴女おもての面、

凄すぢきばかり白く臍ろうた長けたり。

露も散らさぬお前たち、花の姿に氣の毒だね。（下りかかりて

壇に弱腰、廊下に裳もすそ。）

薄もつたい 勿体ないことを御意遊ばす。——まあ、お前様、あんなも

のを召しまして。

夫人 似合つたかい。

薄 なおその上に、御前様ごぜんさま、お痩せ遊ばしておがまれます。柳

よりもお優しい、すらすらと雨の刈萱かるかやを、お被かけ遊ばしたよ

うにござります。

夫人 嘘うそばかり。小山田の、案山子かかしに借りて来たのだものを。

薄 いいえ、それでも貴女あなたがめしますと、玉、白銀しろがね、揺ゆるぎの糸の、

鎧よろいのようにもおがまれます。

夫人 賞ほめられてちつと重くなつた。（蓑を脱ぐ）取っておく

れ。

撫子、立ち、うけて欄干にひらりと掛く。

蝶の数、その蓑に翼を憩う。……夫人、獅子頭に会釈しつ
つ、座に、褥しとねに着く。脇息きょうそく。

侍女たちかしづく。

少し草臥くたびれましたよ。……お亀様はまだお見えではなかつた
ろうね。

薄 はい、お姫様ひいさまは、やがてお入りいりでござりましょう。それにつ
けまして、お前様おかえりを、お待ち申上げました。――
そしてまあ、いずれへお越し遊ばしました。

夫人 夜叉やしやヶ池いけまで参つたよ。

薄 おお、越前国大野郡おおのごおり、人跡絶えました山奥の。

萩 あの、夜叉ヶ池まで。

桔梗 お遊びに。

夫人 まあ、遊びと言えは遊びだけれども、大池のぬしのお雪様に、ちつと……頼みたい事があつて。

薄 わたくし 私はじめ、ここに居ります、誰ぞお使いをいたしますもの、御自分おいで遊ばして、何と、雨にお逢いなさいましてさ。

夫人 その雨を頼みに行きましました。——今日はね、この姫路

の城……ここから視れば長屋だが、……長屋の主人、それ、

播磨守が、秋の野山へ鷹狩に、大勢で出掛けました。皆知つ

ておいでだろう。空は高し、渡鳥、色鳥の鳴く音は嬉しいが、

田畑と言わず駈廻つて、きやつきやつと飛騒ぐ、知行とりど

も人間の大声は騒がしい。まだ、それも鷹ばかりなら我慢もする。近頃は不作法な、弓矢、鉄砲で荒立つから、うるさきもうるさしき。何よりお前、私のお客、この大空の霧を渡つ

て輿かこでおいでのお亀様にも、途中失礼だと思つたから、雨風と、はたした神で、鷹狩の行列を追崩す。——あの、それを、夜叉ヶ池のお雪様にお頼み申しに参つたのだよ。

薄 道理こそ時ならぬ、急な雨と存じました。

夫人 この辺あたりは雨だけかい。それは、ほんの吹降りの余波なごりであらう。鷹狩が遠出をした、姫路野の一里塚のあたりをお見な。

暗夜やみよのような黒い雲、眩まばゆいばかりの電光いなびかり、可恐おそろしい雹ひょうも降りま

した。鷹狩の連中は、曠野あらのの、塚の印しるしの松の根に、濡みに寄つた

鮒ふなのように、うようよ集たかつて、あぶあぶして、あやい笠が泳

ぐやら、陣羽織が流れるやら。大小をさしたものが、ちつと

は雨にも濡れたが可いい。慌てる紋は泡沫あぶくのよう。野袴のばかまの裾すそを

端折はしよつて、灸きゆうのあとを出すのがある。おお、おかしい。(微笑ほほえ

む) 粟粒あわつぶを一つ二つと算かぞえて拾かう雀すずめでも、俄雨にわかあめには容よう子が可す

い。五百石、三百石、千石一人で食むものが、その笑止さと言つてはない。おかしいやら、氣の毒やら、ねえ、お前。

薄　はい。

夫人　私はね、群鷺ヶ峰むらさぎみねの山の端はに、掛稻かけいねを楯たてにして、戻道もどりみちで、そつと立つて視ながめていた。そこには昼の月があつて、雁金かりがねのように（その水色の袖をおさう）その袖に影が映つた。影が、結んだ玉ずさのようにも見えた。——夜叉ヶ池のお雪様は、激はげしいなかにお床ゆかしい、野はその黒雲くろくも、尾上おのえは瑠璃るり、皆、あの方のお計はかりらい。それでも鷹狩の足も腰も留めさせずに、大風と大雨で、城まで追返しておくれの約束。鷹狩たちが遠くから、松を離れて、その曠野を、黒雲の走る下に、泥川のように流れてくるに従つて、追手おいての風の横吹よこしおき。私が見ていたあたりへも、一村雨むらさめさつ颯とかかつたから、歌も読まずに蓑をかりて、案

山子の笠をさして来ました。ああ、その蜻蛉とんぼと鬼灯ほおずきたち、
小児こどもに持たして後ほどに返しましょう。

薄 何の、それには及びますまいと存じます。

夫人 いえいえ、農家のものは大切だから、等閑なわざりにはなりません。

薄 その儀は畏かしこまりました。お前様、まあ、それよりも、おめしかえを遊ばしませ、おめしものが濡れまして、お気味が悪うござりましょう。

夫人 おかげで濡れはしなかった。気味の悪い事もないけれど、隔てぬ中の女同士も、お亀様に、このままでは失礼だろう。

(立つ) 着換えましょうか。

女郎花 ついでに、お髪ぐしも、夫人だんなさま様

夫人 ああ、あげてもらおうよ。

夫人に続いて、一同、壁の扉に隠る。女童めのわらわのこりて、合唱す——

ここはどここの細道じゃ、細道じゃ。

天神様の細道じゃ、細道じゃ。

時に棟に通ずる件くだんの階子はしごを棟よりして入来いりきたる、岩代国麻耶郡猪苗代の城、千畳敷の主ぬし、亀姫ともがしらの供頭まなこつがら、朱の盤坊、大山伏の扮装いでたち、頭に犀さいのごとき角一つあり、眼まなこ円つらかに面の色朱よりも赤く、手と脚、瓜うりに似て青し。白布しろぬのにて蔽おほうたる一個こおけの小桶こおけを小脇こわきに、柱をめぐりて、内を覗のぞき、女童たわむの戯るを視みつつ破顔して笑う

朱の盤 かちかちかちかち。

齒かみなを喃鳴なみらす音をさす。女童等、走りちかづ近く時、面つらを差寄せ、

大口あ開く。

もおう！（獸の吠ゆる真似して威す。）

女董一 可厭いやな、小父おじさん。

女童二 可恐こわくはありませんよ。

朱の盤 だだだだだ。（濁れる笑わらい）いや、さすがは姫路お天守

の、富姫御前の禿かむろたち、変化心備へんげしんわつて、奥州第一あかつらの赭面あかつらに、

びくともせぬは我折がれ申す。——さて、更あらためて内方うちかたへ、もの

も、案内を頼みましよう。

女童三 屋根から入った小父さんはえ？

朱の盤 これはまた御挨拶ごあいさつだ。ただ、猪苗代から参つたと、さ

さ、取次、取次。

女童一 知らん。

女童三 べいい。（赤べろする。）

朱の盤 これは、いかな事——（立直る。大音に）ものも案内。

薄 どうれ。(壁より出迎う) はずれから。

朱の盤 これは岩代国会津郡十文字ヶ原青五輪のあたりに罷在まかりあ

る、奥州変化の先達せんだつ、允殿館いんでんかんのあるじ朱の盤坊でござる。す

なわち猪苗代の城、亀姫君の御供をいたし罷出まかりでました。当お

天守富姫様へ御取次を願いたい。

薄 お供御苦勞に存じ上げます。あなた、お姫様ひいさまは。

朱の盤 (真仰まおむ向けに承塵てんじようを仰ぐ) 屋の棟に、すでに輿かこをばお

控えなさるる。

薄 夫人うちかたも、お待兼ねでございます。

手を敲たたく。音につれて、侍女三人出づ。斉ひとしく手をつく。

早や、御入おんいらせ下さりませ。

朱の盤 (空へ云う) 輿かこ傍へ申す。此方こなたにもお待まちうけじや。――

姫君、これへお入いりのよう、舌長姥したながうば、取次がつけえ。

階子はしごの上より、真先まつさきに、切禿きりかむろの女童、うつくしき手鞠てまりを両袖に捧げて出づ。

亀姫、振袖、裯うちがけ襦、文金の高髻たかまげ、扇子を手にす。また女童、うしろに守刀まもりがたなを捧ぐ。あと圧おさえに舌長姥、古びて黄ばめる練衣ねりぎぬ、褪あせたる紅あかの袴はかまにて従きたい来る。

天守夫人、侍女を従え出で、設けの座に着く。

薄
(そと亀姫を仰ぐ) お姫様ひいさま。

出むかえたる侍女等、皆ひれ伏す。

亀姫 お許し。

しとやかに通り座につく。と、夫人と面おもてを合すとともに、双方よりひたと褥しとねの膝を寄す。

夫人 (親しげに微笑ほほえむ) お亀様。

亀姫 お姉様あねえさま、おなつかしい。

夫人 私もお可懐い。なつかし ——

—— (間。)

女郎花 夫人。おくさま (と長煙管にて煙草を捧ぐ。ながぎせる たばこ)

夫人 (取つて吸う。そのまま吸口を姫に渡す) この頃は、め
しあがるそうだね。

亀姫 ええ、どちらも。(うけて、その煙草を吸いつつ、左の手
にて杯の真似をす。)

夫人 困りましたねえ。(また打笑む。うちえ)

亀姫 ほほほ、貴女をあなた旦那様にはいたすまいし。

夫人 憎らしい口だ。よく、それで、猪苗代から、この姫路ま
で——道中五百里はあろうねえ、……お年寄。

舌長姥 御意にござります。……海も山もさしわたしに、風で
お運び遊ばすゆえに、半日路には足りませぬが、宿々しゆくじゆくを歩いひろ

ましたら、五百里……されば五百二十里、もそつともござり
ましようぞ。

夫人 ああね。(亀姫に)よく、それで、手鞠をつきに、わざわ
ざここまでおいでだね。

亀姫 でございますから、お姉様は、あねえさま私がかわゆお可愛うございませ
う。

夫人 いいえ、お憎らしい。

亀姫 御勝手。(扇子を落す。)

夫人 やつぱりお可愛い。(その背を抱き、見返して、姫に附添
える女童に)どれ、お見せ。(手鞠を取る)まあ、綺麗な、私
にも持つて来て下されば可よいものを。

朱の盤 ははッ。(その白布の包を出し)姫君より、貴女様へ、
お心入れの土産がこれに。申すは、差出がましゅうござるな

れど、これは格別、奥方様の思召おぼしめしにかなひましよう。…何と、姫君。(色を伺う。)

亀姫 ああ、お開き。お姉様の許とこだから、遠慮はない。

夫人 それはそれは、お嬉しい。が、お亀様は人が悪い、中は

磐梯山ばんだいさんの峰の煙か、虚空蔵こくうぞうの人魂ひとたまではないかい。

亀姫 似たもの。ほほほほほ。

夫人 要りません、そんなもの。

亀姫 上げません。

朱の盤 いやまず、(手を挙げて制す)おなかがよくてお争い、お

言葉の花が蝶のように飛びまして、お美しい事でござる。……

さて、此方こなたより申す儀ではなけれども、奥方様、この品ばか

りはお可厭いやではござるまい。

包を開く、首桶くびおけ。中より、色白き男の生首を出し、もとど

りを掴つかんで、ずうんと据つう。

や、不重宝ふちようほう、途中揺溢ゆりこぼいて、これは汁つゆが出ました。(その首、血だらけ)これ、姥殿うば、姥殿。

舌長姥 あいあい、あいあい。

朱の盤 御進物が汚れたわ。鱗うろこの落ちた鱸すずきの鰭ひれを真水で洗う、手の悪い魚売人には似たれども、その儀では決してない。姥殿、此方こなた、一拭ひとぬぐい、清めた上で進すすぜまいかの。

夫人 (煙管を手に支つき、面正おもてしく屹きつと視みて) 氣遣いには及びません、血だらけなは、なおおいしかろう。

舌長姥 こぼれた羹あつものは、埃溜はきだめの汁でござるわの、お塩梅あんばいには寄りませぬ。汚穢むさや、見た目に、汚穢むさや。どれどれ掃除して参らしようぞ。(紅あかの袴はかまにて膝行いざり出で、桶しわでを皺手しわでにひしと圧おさえ、白髪しらがを、ざつと捌さばき、染めたる齒けを角けたに開け、三尺ばかりの

長き舌にて生首の顔の血をなめる) 汚穢や、(ぺろぺろ) 汚穢
 やの。(ぺろぺろ) 汚穢やの、汚穢やの、ああ、甘味うまやの、汚
 穢やの、ああ、汚穢いぞの、やれ、甘味いぞのう。

朱の盤 あわただ(慌しく遮る) やあ、姥ばあさん、齒を当てまい、御馳走

が減りはせぬか。

舌長姥 何のいの。(ぐつたりと衣紋えもんを抜く) 取る年の可恐おそろし

さ、近頃は齒が悪うて、人間の首や、沢庵たくあんの尻尾しっぽはの、かく

やにせねば咽喉のどへは通らぬ。そのままの形では、金花糖の鯛

でさえ、横嚙よこかじりにはならぬ事よ。

朱の盤 後生らしい事を言うまい、彼岸は過ぎたぞ。——いや、

奥方様、この姥くだんが件の舌にて舐なめますると、鳥獸とりけものも人間も、と

ろとろと消えて骨ばかりになりますわ。……そりやこそ、申

さぬことではなかつた。お土産の顔つきが、時の間まに、細長

うなりました。なれども、過失あやまちの功名、死んで変りました人相が、かえって、もとの面体めんていに戻りました。……姫君も御覽ぜい。

亀姫　（扇子を顔に、透かし見る）ああ、ほんになあ。

侍女等一同、瞬きもせず熟じつと視みる。誰も一口食べたそう。

薄　お前様——あの、皆さんも御覽なさいまし、亀姫様お持たせのこの首は、もし、この姫路の城の殿様の顔に、よく似ているではござんせぬか。

桔梗　真ほんに、瓜二つでございますねえ。

夫人　（打領うちうなずく）お亀様、このお土産は、これは、たしか……

亀姫　はい、私が廂ひさしを貸す、猪苗代亀ヶ城しろの主、武田衛門之介えもんのすけの首でございますよ。

夫人　まあ、貴女あなた。（間）私のために、そんな事を。

龜姫 構いません、それに、私がいたしたとは、誰も知りはし
 ませんもの。私が城を出ます時はね、まだこの衛門之介はお
 妾めかけの膝よりに凭掛かかつて、酒を飲んでおりました。お大名の癖くせに意
 地いぢが汚よごくつてね、鯉こいし汁じゆを一口に食べますとね、魚はらわたの腸はらわたに針が
 あつて、それが、咽喉のどへささつて、それで亡なくなるのでござ
 いますから、今頃ちようどそのお膳ぜんが出たぐらいでございま
 すよ。（ふと驚く。扇子せんすを落す）まあ、うっかりして、この咽
 喉のどに針がある。（もとどりを取つて上ぐ）大変なことをした、
 お姉あね様さまに刺ささつたらどうしよう。

夫人 しばらく！ 折角せつかく、あなたのお土産みやげを、いま、それをお
 抜きだと、衛門之介も針が抜けて、蘇よみがえ返がえつてしまひましよう。
 朱の盤ばん いかさまな。

夫人 私が気をつけます。可ようござんす。（扇子せんすを添そえて首を受

取る）お前たち、瓜を二つは知れたこと、この人はね、この姫路の城の主、播磨守とは、血を分けた兄弟よ。

侍女等目と目を見合わす。

ちよつと、獅子にお供え申そう。

みずから、獅子頭の前に供う。獅子、その牙きばを開き、首を呑む。首、その口に隠る。

亀姫（熟じつと視みる）お姉様あねえさま、お羨うらやましい。

夫人 え。

亀姫 旦那様が、おいで遊ばす。

間。——夫人、姫と顔を合す、互かんじに莞爾かんじとす。

夫人 嘘まじとが真まじとに。……お互まじとに……

亀姫 何の不足はないけれど、

夫人 こんな男ほしが欲ほしいねえ。——ああ、男と云えば、お亀様、あ

なたに見せるものがある。——桔梗さん。

桔梗 はい。

夫人 あれを、ちよつと。

桔梗 かしこ畏まりました。(立つ。)

朱の盤 (不意に) や、姥殿、獅子のお頭に見惚れまい。尾籠
千万。

舌長姥 (時に、うしろ向きに乗出して、獅子頭を視めつつあ
り) としより老人じゃ、やかた当館奥方様も御許され。見惚れるに無理はな
いわいの。

朱の盤 いやさ、見惚れるに仔細しさいはないが、姥殿、姥殿はそこ
に居て舌が届く。(苦笑す。)

舌長姥思わず正面にその口を蔽おほう。侍女等忍びやかに皆笑
う。桔梗、くわがた鍬形打つたる五枚鍬しころ、金の竜頭の兜かぶとを捧げて出

づ。夫人と亀姫の前に置く。

夫人 貴女、この兜はね、この城の、播磨守が、先祖代々の家の宝で、十七の奥蔵おくぐらに、五枚鍔じように九ツの錠おろを下して、大切に秘蔵ひそをしておりますのをね、今日お見えの嬉しさに、実は、貴女に上げましようと思つて取出しておきました。けれども、御心入おこころいりの貴女のお土産みやで、私のはお恥しくなりました。それだから、ただ思つただけの、申訳に、お目に掛けますばかり。

亀姫 いいえ、結構、まあ、お目覚しい。

夫人 差上げません。第一、あとで気がつきますとね、久しく蔵しまいこ込んであつて、かび臭い。蘭麝らんじやの薫かおりも何にもしません。大阪城の落ちた時の、木村長門守の思切つたようなのだと可いけれど、……勝戦かちいくさのうしろの方で、矢玉あまやどりの雨宿あまやどりをしていた、ぬくいのらしい。御覧なさい。

亀姫 （鉢金の輝く裏を返す）ほんに、討死をした兜ではあり

ませんね。

夫人 だから、およしなさいまし、葛や、しばらくそこへ。

指図のまま、葛、その兜を獅子頭の傍かたえに置く。

お帰りまでに、きつとお気に入るものを調べて上げますよ。

亀姫 それよりか、お姉様あねえさま、早く、あのお約束の手鞠てまりを突いて

遊びましょうよ。

夫人 ああ、遊びましょう。——あちらへ。——城の主人あるじの鷹

狩が、雨風に追われ追われて、もうやがて大手さきに帰る時

分、貴女は沢山たんとお声がいいから、この天守から美しい声が響

くと、また立騒うるわいでお煩い。

亀姫のかしずきたち、皆立ちかかる。

いや、御先達、お山伏は、女たちとここで一献いっこんお汲くみがよい

よ。

朱の盤 吉祥天女、御功德でござる。(肱を張って叩頭す。)

龜姫 ああ、姥、お前も大事ない、ここに居てお相伴をしや。

——お姉様に、私から我儘をしますから。

夫人 もつともさ。

舌長姥 もし、通草、山ぐみ、山葡萄、手造りの猿の酒、山蜂の

蜜、蟻の甘露、諸白もござります、が、お二人様のお手鞠は、

唄を聞きますばかりでも寿命の薬と承る。かように年を取り

ますと、慾も、得も、はは、覚えませぬ。ただもう、長生が

しとうござりましてのう。

朱の盤 や、姥殿、その上のまた慾があるかい。

舌長姥 憎まれ山伏、これ、帰り途に舐められさつしやるな。

(とぺろりと舌。)

朱の盤（頭を抱う）わあ、助けてくれ、角が縮まる。

侍女たち笑う。

舌長姥 さ、お供をいたしましよの。

夫人を先に、亀姫、薄と女の童等、皆行く。五人の侍女と

朱の盤あり。

桔梗 お先達、さあさあ、お寛ぎなさいまし。

朱の盤 寛がいで何とする。やあ、えいとな。

萩 もし、面白いお話を聞かして下さいました。

朱の盤 聞かさいで何とする。（扇を笏に）それ、山伏と言っ

ぱ山伏なり。兜巾とぎんと云っぱ兜巾なり。お腰元と言っぱ美人な

り。恋路と言っぱ闇夜やみよなり。野道山路やまみち厭いとなく、修行積んだ

る某それがしが、このいら高の数珠じゆずに掛け、いで一祈り祈るならば、

などか利験りげんのなかるべき。橋の下の菖蒲しょうぶは、誰が植えた菖蒲

ぞ、ぼろぼん、ぼろぼん、ぼろぼんのぼろぼん。

侍女等わざとはらはらと逃ぐ、朱の盤五人を追廻す。

ぼろぼんぼろぼん、ぼろぼんぼろぼん。（やがて侍女に突かれ
て撞どと倒る）などか利験どのなかるべき。

葛 利験はござんしょうけれどな、そんな話は面白うござんせぬ。

朱の盤 （首を振つて）ぼろぼん、ぼろぼん。

鞠唄聞ゆ。

——私わしが姉あねさん三人ござる、一人姉さん鼓が上手。

一人姉さん太鼓が上手。

いっちよいのが下谷したやにござる。

下谷一番達だてしやでござる。二両で帯買うて、

三両で括くけて、括くけめ括くけめに七総ななふささげて、

折りめ折りめに、いろはと書いて。——

葛 さあ、お先達、よしの葉の、よい女郎衆ではござんせぬが、
参つてお酌。(扇を開く。)

朱の盤 ぼろぼんぼろぼん。(同じく扇子にうく) おとととと、
ちようどあるちようどある。いで、お肴を所望しよう。……
などか利験のなかるべき。

桔梗 その利験ならござんしょう。女郎花さん、撫子さん、ちよつ
と、お立ちなさいまし。

両女立つ。

ここをどこぞと、もし人問わば、ここは駿河の
府中の宿よ、人に情を掛川の宿よ。雉子の雌鳥
ほろりと落いて、打ちきせて、しめて、しよのしよの
いとしよの、そぞろいとしゆうて、遣瀬なや。

朱の盤 やんややんや。

女郎花 今度はお先達、さあ。

葛 貴方あなたがお立ちなさいまし。

朱の盤 ぼろぼん、ぼろぼん。此方衆思こなたおもいぎしを受きようならば。

侍女五人扇子を開く、朱の盤杯を一順す。すなわち立つ。

腰なる太刀をすらりと抜き、以前の兜を切先きつさきにかけて、衝

と天井に翳かざし、高脛たかすねに拍子を踏んで――

戈鋌かせんけんげき劍戟を降らすこと電光の如くなり。

盤石ばんじやく巖いわを飛ばすこと春の雨に相同じ。

然しかりとはいえども、天帝の身には近づかで、

修羅かれがために破らる。

――お立ち――、(陰より諸声もろこえ)

手早く太刀を納め、兜をもとに直す、一同つい居る。

亀姫 お姉様あねえさま、今度は貴方が、私へ。

夫人 はい。

舌長姥 お早々と。

夫人 (領うなずきつつ、連れて廻廊にかかる。目の下遥はるかに瞰みおろ下す) あ

あ、鷹狩が帰って来た。

亀姫 (ともに、瞰下す) 先刻さつき私が参る時は、蟻のような行列

が、その鉄砲で、松並木を走っていました。ああ、首に似た

殿様が、馬に乗って反返そりかえつて、威張つて、本丸へ入って来ま

すね。

夫人 播磨守さ。

亀姫 まあ、翼の、白い羽の雪のような、いい鷹を持っている

よ。

夫人 おお。(軽く胸を打つ) 貴女。(間) あの鷹を取って上げ

ましようね。

亀姫 まあ、どうしてあれを。

夫人 見ておいで、それは姫路の、富だもの。

蓑みのを取つて肩に装う、美しき胡蝶こちょうの群、ひとしく蓑に舞う。

颯さっと翼を開く風情す。

それ、人間の目には、羽衣を被きた鶴に見える。

ひらりと落す特、一羽の白鷹さっ颯と飛んで天守に上るを、手

に捕う。

——わつと云う声、地より響く——

亀姫 お涼しい、お姉様あねえさま。

夫人 この鷹ならば、鞠を投げてもとりましたよう。——沢山たんとお

遊びなさいまし。

亀姫 あい。(嬉しげに袖に抱いだく。そのまま、真先まつさきに階子はしごを上

る。二三段、と振返りて、衝と鷹を雪の手に据うるや否や）虫が来た。

云うとともに、袖を払つて一筋の征矢をカラリと落す。矢は鷹狩の中より射掛けたるなり。

夫人（齊ひとしくともに）む。（と肩をかわし、身を捻ひねつて背向そがいになる、舞台に面を返す時、口に一条の征矢、手にまた一条の矢を取る。下より射たるを受けたるなり）推参な。

——たちまち鉄砲の音、あまたたび——

薄　それ、皆さん。

侍女等、身を垣にす。

朱の盤　姥殿、確しっかり。（姫を庇かほうて大手を開く。）

亀姫　大事な、大事な。

夫人（打笑む）ほほほ、皆が花火線香をお焚たき——そうする

と、鉄砲の火で、この天守が燃えると思つて、吃驚びつくりして打たなくなつたから。

——舞台やや暗し。鉄砲の音止やむ——

夫人、亀姫と声を合せて笑う、ほほほほほ。

夫人 それ、御覧、ついでにその火で、焼けそうな処を二三ケしよ処焚やくが可いい、お亀様の路みちの松明たいまつにしようから。

舞台暗し。

亀姫 お心づくしお嬉しや。さらば。

夫人 さらばや。

寂寞せきぱく、やがて燈火ともしびの影に、うつくしき夫人の姿。舞台にただ一人のみ見ゆ。夫人うしろむきにて、獅子頭ししづかに対し、机まに向い巻まきものを読みつつあり。間まを置き、女郎花せな、清らかなる小搔こがい巻まきを持ち出で、静しずかに夫人の背せなに置き、手をつかえ

て、のち去る。――

ここはどこの細道じゃ、細道じゃ。

天神様の細道じゃ、細道じゃ。

舞台一方の片隅に、下の四重に通ずべき階子の口あり。その口より、まず一の雪洞頭れ、一廻りあたりを照す。やがて衝と翳すとともに、美丈夫、秀でたる眉に勇壯の氣満つ。黒羽二重の紋着、萌黄の袴、臘鞞の大小にて、姫川図書之助登場。唄をききつつ低徊し、天井を仰ぎ、廻廊を窺い、やがて燈の影を視て、やや驚く。ついで几帳を認む。彼が入るべき方に几帳を立つ。図書は躊躇の後決然として進む。瞳を定めて、夫人の姿を認む。劍夾に手を掛け、氣構えたるが、じりじりと退る。

夫人 (間) 誰。

図書 はつ。(と思わず膝を支く) 某^{それがし}

夫人 (面のみ振向く、——無言。)

図書 私は、当城の太守に仕うる、武士の一人^{いちにん}でございます。

夫人 何しに見えた。

図書 百年以来、二重三重までは格別、当お天守五重までは、生^{しよ}あるものの参つた例^{ためし}はありませぬ。今宵、大殿の仰せに依つて、私^{わたくし}、見届けに参りました。

夫人 それだけの事か。

図書 且つまた、大殿様、御秘蔵の、日本一の鷹がそれまして、お天守のこのあたりへ隠れました。行方を求めよとの御意でございます。

夫人 翼あるものは、人間ほど不自由ではない。千里、五百里、勝手な処へ飛ぶ、とお言いなさるが可^よい。——用はそれだけ

か。

図書 別に余の儀は承りませぬ。

夫人 五重に参つて、見届けた上、いかが計らえとも言われなかつたか。

図書 いや、承りませぬ。

夫人 そして、お前も、こう見届けた上に、どうしようとも思いませぬか。

図書 お天守は、殿様のものでございます。いかなる事がありましようとも、私わたくし一存にて、何と計らおうとも決して存じませぬ。

夫人 お待ち。この天守は私のものだよ。

図書 それは、あなた貴方のものかも知れませぬ。また殿様は殿様で、御自分のものだと御意遊ばすかも知れませぬ。しかし、いず

れにいたせ、私のものでないことは確たしかでございませぬ。自分のものでないものを、殿様の仰せも待たずに、どうしようとも思ひませぬ。

夫人　　すずしい言葉だね、その心なれば、ここを無事で帰られよう。私も無事に帰してあげます。

凶書　　冥加みよがに存じます。

夫人　　今度は、播磨が申しきけても、決して来てはなりません。ここは人間の来る処ではないのだから。——また誰も参らぬように。

凶書　　いや、私わたくしが参らぬ以上は、五十万石の御家中、誰一人参りますものにはございませぬ。皆生命いのちが大切でございませぬら。

夫人　　お前は、そして、生命は欲しゅうなかつたのか。

図書 わたくし 私は、仔細しさいあつて、殿様の御不興を受け、お目通めどおりを遠ざけられ閉門の処、誰もお天守へ上あがりますものがないために、急にお呼出してごさいました。その御上使は、実は私わたくしに切腹仰せつけの処を、急に御模様がえになつたのでごさいます。

夫人 では、この役目が済めば、切腹は許されますか。

図書 そのお約束でございました。

夫人 人の生死いししには構いませんが、切腹はさしたくない。私は武士の切腹は嫌いだから。しかし、思い掛がけなく、お前の生命いのちを助けました。……悪い事ではない。今夜はいい夜よだ。それではお帰り。

図書 姫君。

夫人 まだ、居ますか。

図書 は、恐入つたる次第ではごさいますが、御姿を見ました

事を、主人に申まして差支えはございませんか。

夫人たしか 確にお言いなさいまし。留守でなければ、いつでも居るから。

図書 武士の面目に存じます——御免。

雪洞ほんぼりを取つて静しずかに退座す。夫人長煙管ながぎせるを取つて、払はたく音に、
図書板敷にて一度留とどまり、直ちに階子はしごの口にて、燈ともしびを下に、
壇に隠る。

鐘の音。

時に一体の大入道、面つらも法衣ころもも真黒まっくろなるが、もの陰かげより薨いらか
を渡り梢こずえを伝つたうがごとくにして、舞台の片隅かたぐもを伝つたい行き、
花道なる切穴きりあなの口くちに踞うずくまる。

鐘の音。

図書、その切穴きりあなより立たち顕あらわる。

夫人すつと座を立ち、正面、鼓の緒の欄干に立ち熟と視る時、凶書、雪洞を翳して高く天守を見返す、トタンに大入道さし覗きざまに雪洞をふつと消す。凶書身構す。大入道、大手を拵げてその前途を遮る。

鐘の音。

侍女等、凜々しき扮装、揚幕より、懐劍、薙刀を構えて出づ。凶書扇子を抜持ち、大入道を払い、懐劍に身を躲し、薙刀と丁と合わす。かくて一同を追込み、揚幕際に扇を揚げ、屹と天守を仰ぐ。

鐘の音。

夫人、従容として座に返る。凶書、手探りつつもとの切穴を捜る。(間)その切穴に没す。しばらくして舞台なる以前の階子の口より出づ。猶予わず夫人に近づき、手をつく。

夫人 (先んじて声を掛く。穩おだやかに) また見えたか。

図書 はつ、夜陰と申し、再度御左右おそを騒がせ、まことに恐入りました。

夫人 何しに来ました。

図書 御天守の三階中壇まで戻りますと、鳶とびばかり大さの、野衾のぶすまかと存じます、大蝙蝠おおこうもりの黒い翼に、燈ともしびを煽あおぎ消されまして、いかにとも、進退度を失いましたにより、灯を頂きに参りました。

夫人 ただそれだけの事に。……二度とおいででないと申した、私の言葉を忘れましたか。

図書 針ばかり片割月かたわれづきの影もささず、下に向えば真やみの暗黒。男が、足を踏みはずし、壇を転がり落ちまして、不具かたわになどなりましては、生効いきがもないと存じます。上を見れば五重のここよ

り、かすか幽にお燈あかりがさしました。お咎とがめをもつて生命をめさりよ
うとも、男といたし、階子から落ちて怪我けがをするよりはと存
じ、おんいましめ御戒をも憚はばからず推参おしんいたしてございます。

夫人 にっこり（莞爾と笑む）ああ、爽さわやかなお心、そして、貴方はお勇
しい。あかり燈を点けて上げましょうね。（座を寄す。）

図書 いや、お手ずからは恐多い。わたくし私が。

夫人 いえいえ、この燈ともは、明星、北斗星、竜の燈、玉の光も
おなじこと、お前の手では、蠟燭ろうそくには点つきません。

図書 ははッ。（瞳こらを凝す。）

夫人、世話めかしく、雪洞ぼんぼりの蠟ろうを抜き、短檠たんけいの灯を移す。燭しよく
をとつて、熟じつと図書おもての面を視みる、恍惚うっとりとす。

夫人 （蠟燭ろうそくを手にしたるまま）帰かへしたくなくなつた、もう帰
すまいと私は思う。

凶書 ええ。

夫人 貴方は、播磨が貴方に、切腹を申しつけたと言いました。それは何の罪でございます。

凶書 わたくしこぶし 私が拳に据えました、殿様が日本一とて御秘蔵の、白い鷹を、このお天守へ逸そらしました、その越度おちど、その罪過でございます。

夫人 何、鷹をそらした、その越度、その罪過、ああ人間というものは不思議な咎とがを被おおせるものだね。その鷹は貴方が勝手に鳥に合せたのではありますまい。天守の棟に、世にも美しい鳥を視みて、それが欲しさに、播磨守が、自分で貴方にいいつけて、勝手に自分でそらしたものを、貴方の罪にしますのかい。

凶書 しゅう 主と家来でございます。仰せのまま生命いのちをさし出します

のが臣たる道でございます。

夫人 その道は曲つていきましょう。間違つたいいつけに従うのは、主人に間違つた道を踏ませるのではありませんか。

図書 けれども、鷹がそれました。

夫人 ああ、主従とかは可恐おそろしい。鷹とあの人間の生命いのちとを取とりかえるのでございますか。よしそれも、貴方が、貴方の過失あやまちなら、君と臣というもののそれが道なら仕方がない。けれども、播磨がさしずなら、それは播磨の過失というもの。第一、鷹を失つたのは、貴方ではありません。あれは私が取りました。

図書 やあ、貴方が。

夫人 まことに。

図書 ええ、お怨うらみ申上ぐる。(刀に手を掛く。)

夫人 鷹は第一、誰のものだと思えます。鷹には鷹の世界がある。露霜の清い林、朝嵐夕風の爽かな空があります。決して人間の持ちものではありません。諸侯だいまいようなどというものが、思上った行過ぎな、あの、鷹を、ただ一人じめに自分のものと、つけ上りがしています。貴方はそうは思いませんか。

図書 (沈思す、間) 美しく、気高い、そして計り知られぬ威のある、姫君。——貴方にはお答いいたこが出来かねます。

夫人 いえ、いえ、かどだてて言籠いいたこめるのではありません。私の申すことが、少しなりともお分りになりましたら、あのその筋道の分らない二三の丸、本丸、太閤丸たいこうまる、廓内くわううち、御家中の世間へなど、もうお帰りなさいませぬ。白銀しろがね、黄金こがね、球、珊瑚さんご、千石万石の知行より、私が身を捧げます。腹を切らせる殿様のかわりに、私の心を差上げます、私の生命いのちを上げましょう。

貴方お帰りなさいますな。

図書 迷いました、姫君。殿に金鉄の我が心も、波打つばかり
悩乱をいたします。が、決心が出来ません。私は親にも聞き
たし、師にも教えられたし、書もつにも聞かねばなりません。
お暇いとまを申し上げます。

夫人 (歎息す) ああ、まだ貴方は、世の中に未練がある。そ
れではお帰りなさいまし。(この時蠟燭を雪洞に) はい。

図書 途方に暮れつつ参ります。迷まよひの多い人間を、あわれとば
かり思召せ。

夫人 ああ、優しいそのお言葉で、なお帰したくなくなつた。
(袂たもとを取る。)

図書 (屹きつとして袖を払う) 強いて、たつて、お帰しなくば、お
抵抗てむかいをいたします。

夫人 (微笑^{ほほえ}み) あの私に。

図書 おんでもない事。

夫人 まあ、お勇ましい、凜^{りり}々しい。あの、獅子に似た若いお方、お名が聞きたい。

図書 夢のような仰せなれば、名のありなしも覚えませぬが、
姫川図書之助と申します。

夫人 可^{なつかし}懐い、嬉しいお名、忘れません。

図書 以後、お天守下^{した}の往^{ゆき}かいには、誓^{ちか}つて礼拝をいたします。
——御免。(衝^{つっ}と立つ。)

夫人 ああ、図書様、しばらく。

図書 是非もない、所詮^{しょせん}活^いけてはお帰^{かへ}しない掟^{おきて}なのでございませ
すか。

夫人 ほほほ、播磨守の家中とは違います。ここは私の心一つ、

掟などは何にもない。

図書 それを、お呼留め遊ばしたは。

夫人 おはなむけがあるのでござんす。——人間は疑深い。卑怯ひきょう

な、臆病おくびょうな、我儘わがままな、殿様などはなおの事。貴方がこの五重

へ上つて、この私を認めたことを誰もほんとうにはせぬであ

ろう。清い、爽かな貴方のために、記念しるしの品をあげましょう。

(静しずかに以前の兜かぶとを取る)——これを、その記念しるしにお持ちなさい

まし。

図書 存じも寄らぬ御おんたまもの、姫君に向い、御辞退はかえつ

て失礼。余り尊い、天晴あつぱれな御兜おんかぶと。

夫人 金銀は堆うずたかけれど、そんなにいい細工ではありません。し

かし、武田には大切な道具。——貴方、見覚えがありますか。

図書 (疑うたがひの目を凝こらしつつあり) まさかとは存たもずるなり、私わたくしと

ても年に一度、虫干の外には拝ませぬが、ようも似ました、お家の重宝、ちようほう青竜の御兜。

夫人 まつたく、それに違いありません。

図書 がくぜん（愕然とす。急に）これにこそ足の爪立つまだつばかり、心急

ぎがいたします、御暇おいとまを申うけます。

夫人 今度来ると帰しません。

図書 誓つて、——仰せまでもありません。

夫人 さらば。

図書 はつ。（兜を捧げ、やや急いで階子はしびに隠る。）

夫人 （ひとりもの思い、机ほおづえに頬杖つき、獅子にももの言う）貴

方、あの方を——私わたくしに下さいまし。

薄 （静に出づ）お前様。

夫人 薄か。

薄 立派な方でございます。

夫人 今まで、あの人を知らなかった、目の及ばなかった私は
恥かしいよ。

薄 かねてのお望みに叶うた方を、何でお帰しなさいました。

夫人 生命いのちが欲ほしい。抵抗てむかいをすると云うもの。

薄 御一所に、ここにお置き遊ばすまで、何の、生命いのちをお取り
遊ばすのではございませんのに。

夫人 あの人たちの目から見ると、ここに居るのは活いきたもの
ではないのだと思います。

薄 それでは、貴方の御容色ごきりようと、そのお力で、無理にもお引留
めが可ようございますのに。何の、抵抗てむかいをしました処で。

夫人 いや、容色きりようはこちらからは見せたくない。力で、人を強
いるのは、播磨守なんぞの事、真まことの恋は、心と心、……（軽

く) 薄や。

薄は。

夫人 しかし、そうは云うものの、白鷹を据えた、鷹匠たかじょうだと申すよ。——縁だねえ。

薄 きつと御縁がござりますよ。

夫人 私もどうやら、そう思うよ。

薄 奥様、いくら貴女のお言葉でも、これはちと痛入いたみいりました。

夫人 私も痛入りました。

薄 これはまた御挨拶でござります——あれ、何やら、御天守下が騒がしい。(立って欄干に出づ、遥はるかに下を覗込のぞきこむ) ……ま

あ、御覧なさいまし。

夫人 (座のまま) 何だえ。

薄 武士が大勢で、かがり箒を焚たいております。ああ、武田播磨守殿、

御出張、床几しょうぎに掛かつてお控えだ。おぬるくて、のろい癖くせに、もの見高みたかな、せつかちで、お天守見届けのお使いの帰るのを待兼ねて、推出おしだしたのでござります。もしえもしえ、図書様のお姿が小さく見えます。奥様、おたまじゃくしの真中まんなかで、御紋着ごもんつきの御紋も河骨こうぼね、すつきり花が咲いたような、水際立つてお美しい。……奥様。

夫人 知らないよ。

薄 おお、兜あらためがはじまりました。おや、吃驚びつくりした。あの、

殿様の漆うるしみたいな太い眉毛が、びくびくと動きますこと。

先刻さつきの亀姫様のお土産の、兄弟の、あの首を見せたら、どう

でございましょう。ああ、御家老が居ます。あの親仁おやじも大分

百姓ひゃくしやうを痛めて溜込ためこみましたね。そのかわり頭はが兀はげた。まあ、

皆みんなが図書様を取巻いて、お手柄にあやかるとかしら。おや、

おつとりがたな
追取刀だ。何、何、何、まあ、まあ、奥様々々。

夫人 もう可い。

薄 ええ、もう可いではございません。凶書様を賊だ、と言

ます。御秘蔵の兜を盗んだ謀逆人、謀逆人、殿様のお首に手

を掛けたも同然な逆賊でございますとさ。お庇かげで兜が戻った

のに。——何てまあ、人間というものは。——あれ、捕手とりてが

掛かつた。忠義と知行で、てむかいはなさらぬかしら。しめた、

投げた、嬉しい。そこだ。御家老が肩衣かたぎぬを撥はねましたよ。大勢

が抜連れた。あれ危い。豪えらい。凶書様抜合せた。……一人腕

が落ちた。あら、胴切どうぎり。また何も働かずとも可いことを、五

両二人扶持ににんぶちらしいのが、あら、可哀相かわいそうに、首が飛びます。

夫人 秀吉時分から、見馴みなれていながら、何だねえ、騒々しい。

薄 騒さわがずにはいられません。多勢たせいに一人、あら切抜けた、凶

書様がお天守に遁にげ込みました。追掛けますよ。槍やりまで持出した。(欄干をするすると) 図書様が、二重へ駈かけあが上つておいでなさいます。大勢が追詰めて。

夫人 (片膝立つ) 可よし、お手伝い申せ。

薄 お腰元衆、お腰元衆。—— (呼びつつ忙せわしく階子はしごを下り行く。)

夫人、片手を掛けつつ几帳越に階子の方を瞰みおろ下す。

—— や、や、や、—— 激しき人声、もの音、足踏あしづみ。——

図書、もとどりを放ち、衣服に血を浴ぶ。刀を振ふるつて階子の口に、一度屹きつと下を見込む。肩に波打ち、はつと息して撞どとなる。

夫人 図書様。

図書 (心づき、蹠よろよろと、且つ呼吸いきせいで急いで寄る) 姫君、

お言葉をも顧みず、三度の推参をお許し下さい。私を賊……
 賊……謀逆人、逆賊と申して。

夫人 よく存じておりますよ。昨日今日、今までも、お互に友
 と呼んだ人たちが、いかに殿の仰せとて、手の裏を反すよう
 に、ようまあ、あなたに刃を向けます。

図書 はい、微塵も知らない罪のために、人間同志に殺されま
 しては、おなじ人間、断念められない。貴女のお手に掛りま
 す。——御禁制を破りました、御約束を背きました、その罪
 に伏します。速に生命をお取り下されたい。

夫人 ええ、武士たちの夥間ならば、貴方のお生命を取りましょ
 う。私と一所には、いつまでもお活きなさいまし。

図書 (急ぎつつ) お情余る、お言葉ながら、活きようとて、
 討手の奴儕、決して活かしておきません。早くお手に掛け下

さいまし。貴女に生命を取らるれば、もうこの上のない本望、彼等に討たるるのは口惜くちおしい。(夫人の膝に手を掛く) さ、生命いのちを、生命を——こう云う中にも取詰めて参ります。

夫人 いいえ、ここまでは来ますまい。

図書 五重の、その壇、その階子を、鼠のごとく、上りつ下りついたしおる。……かねての風説、鬼神おにがみより、魔まよりも、ここを恐しと存じておるゆえ、いささか躊躇ちゅうちよはいたしますが、既に、私わたくしの、かく参つたを、認めております。こう云う中にも、たつた今。

夫人 ああ、それもそう、何より前さきに、貴方をおかくまい申しておこう。(獅子頭を取る、母衣ほろを開いて、図書の上に蔽おほいながら) この中へ……この中へ——

図書 や、金城鉄壁。

夫人 いろいろ、柔い。

図書 おおせ 仰の通り、真綿よりも。

夫人 そして、確しつかり、私におつかまりなさいまし。

図書 失礼御免。

夫人の背せなよりその袖すだに縋すがる。縋すがる、と見えて、身体からだその母衣すその裾すそなる方かたにかくる。獅子頭ししづを捧たげつつ、夫人の面おもて、なお母衣すその外そとに見ゆ。

討手うりこどやどやと入い込み、と見てわつと一度退ひく時、夫人も母衣すそに隠かくる。ただ一頭青面の獅子猛然まげんとして舞台ぶたいにあり。討手うりこ。小田原修理しゆり、山隅くへい九平くへい、その他その他。拔身ぬきみの槍やり、刀やいば。中には仰山おんざんに小具足せうぐそくをつけたるもあり。大勢おほし。

九平 ほんぼり (雪洞ゆきどうを寄よす) やあ、怪あやしく、凄すじく、美しい、婦おんなの立姿たちざと見えたはこれだ。

修理 化するわ化するわ。御城の瑞兆ずいちよう、天人のごとき鶴を御覧あつて、殿様、鷹を合せたまえば、鷹はそれ破蓑やれみのを投落す、……

言語道断。

九平 他ほかにない、姫川図書め、死しにものぐるいに、確にそれなる獅子母衣に潜つたに相違なし。やあ、上意だ、逆賊出合いであえ。山隅九平向うたり。

修理 待て、山隅、先方で潜つた奴やつだ。呼んだつて出やしない。取つて押え、引摺出ひきずりだせ。

九平 それ、面々。

修理 気を着けい、うかつにかかると怪我をいたす。元来この青獅子あおじしが、並大抵のものではないのだ。伝え聞く。な、以前こ

れは御城下はずれ、群鷺山むらさぎやまの地主神じしゆじんの宮に飾つてあつた。二代以前の当城殿様、お鷹狩の馬上から——一人町里まちのみとには思い

も寄らぬ、都方みやこがたと見えて、世にも艶麗あでやかな女の、一行いっぎょうを颯さつと避けて、その宮へかくれたのを——とろんこの目で御覽ごらんじたわ。此方こなたは鷹狩たかどり、もみじ山だが、いづれ戦いくさに負けた国の、上臈じょうろう、貴女、貴夫人たちの落人おちうどだろう。絶世ぜっせいの美女だ。しやつ搦出つかみいだいて奉れ、とある。御近習ごきんじゆ、宮の中へ闖入ちんにゆうし、人妻なればと、いなむを捕えて、手取足取しようとしたれば、舌かを嚙かんで真俯向まうつむけに倒れて死んだ。その時にな、この獅子頭じゆを熟じつと視みて、あわれ獅子や、名誉の作かな。わらわにかばかりの力あらば、とらのおおかみ虎狼こらのおおかみの手にかかりはせじ、と吐ほざいた、とな。続いて三年、毎年、秋の大洪水よ。何が、死骸取片づけの山神主しがいが見た、と申すには、獅子かが頭かしらを逆さかにして、その婦おんなの血ちを舐なめ舐なめ、目から涙うらみを流ないたというが触出ふれだしでな。打続うく洪水は、その婦おんなの怨うらみだと、国中これざたの是沙汰おんなだ。婦おんなが前髪まへかみにさしたのが、死ぬ時、

髪をこぼれ落ちたというを拾つて来て、近習が復命をした、白木に刻んだ三輪牡丹高彫ぼたんたかぼりのさし櫛ぐしをな、その時の馬上の殿様は、澄すまして袂たもとへお入れなさった。祟たたりを恐れぬ荒氣の大名。おもしろい、水を出さば、天守の五重を浸ひたして見よ、とそれ、生いけど捉つて来てな、ここへ打上げたその獅子頭だ。以来、奇異妖ようへん変さながら魔所のように沙汰する天守、まさかとは思うたが、目まのあたり不思議を見るわ。——心してかかれ。

九平 心得た、槍をつける。

討手、槍にて立ちかかる。獅子狂う。討手辟へぎえき易す。修理、九平等、拔連れ拔連れ一同立掛たちかかる。獅子狂う。また辟易す。修理 木彫にも精がある。活いきた獣も同じ事だ。目を狙ねらえ、目を狙え。

九平、修理、力を合せて、一ひと刀たちずつ目を傷きずつ、獅子伏す。討

手その頭をおさう。かしら

図書 (母衣ほろを撥退はねのけ刀を揮ふるつて出づ。口々に罵ののしる討手と、一刀合すと齊ひとしく) ああ、目が見えない。(押倒され、取つて伏せらる) 無念。

夫人 (獅子の頭をあげつつ、すつくと立つ。黒髪乱れて面凄おもてすじし。手に以前の生首の、もとどりを取つて提ぐ) 誰の首だ、お前たち、目のあるものは、よつく見よ。(どっしと投ぐ。)

——討手わつと退き、修理、恐る恐るこれを拾う。

修理 南無三寶。なむさんぼう

九平 殿様の首だ。播磨守様御首だ。みしるし

修理 一大事とも言いようなし。御同役、お互に首はあるか。

九平 可恐おそろしい魔ものだ。うかうかして、こんな処に居べきでない。

討手一同、立つ足もなく、生首をかこいつつ、乱れて退く。

図書 姫君、どこにおいでなさいませ。姫君。

夫人、悄然しやうぜんとして、立ちたるまま、もの言わず。

図書 (あわれに寂しく手探り) 姫君、どこにおいでなさいませ。

わたし 私は見えなくなりました。姫君。

夫人 (忍び泣きに泣く) 貴方、私も目が見えなくなりました。

図書 ええ。

夫人 侍女こしもとたち、侍女たち。——せめては燈あかりを——

——皆、盲目めくらになりました。誰も目が見えませぬのでござ

います。——(口々に一同はつと泣く声、壁の彼方かなたに聞ゆ。)

夫人 (獅子頭とともにハタと崩折くずお) 獅子が両眼を傷つけら

れました。この精霊しやうりようで活きましたものは、一人も見えなくな

りました。図書様、……どこに。

図書 姫君、どこに。

さぐり寄りつつ、やがて手を触れ、はつと泣き、相抱く。あいだ

夫人 何と申そうようもない。貴方お覚悟をなさいます。今持たせてやった首も、天守を出れば消えましよう。討手は直ぐに引返して参ります。私一人は、雲に乗ります、風に飛びます、虹にじの橋も渡ります。図書様には出来ません。ああ口惜くやしい。あれら討手のものの目に、蓑笠着ても天人の二人揃った姿を見せて、日の出、月の出、夕日影にも、おがませようと思つたのに、私の方が盲目になつては、ただお生命いのちさえ助けられない。堪忍して下さいまし。

図書 くやみません！ 姫君、あなたのお手に掛けて下さい。

夫人 ええ、人手には掛けますまい。そのかわり私も生きてはおりません、お天守の塵ちり、煤すすともなれ、落葉になつて朽ちま

しよう。

図書 やあ、何のために貴女が、美しい姫の、この世にながらえておわすを土産に、冥土めいどへ行くのでございます。

夫人 いいえ、私も本望でございます、貴方のお手にかかるのが。

図書 真実のお声か、姫君。

夫人 ええ何の。——そうおっしゃる、お顔が見たい、ただ一目。……千歳ちとせももとせ百歳わたくしにただ一度、たった一度の恋なのに。

図書 ああ、私も、もう一目、あの、気高い、美しいお顔が見たい。（あいすが
わたくし
（相縋る。）

夫人 前世ごせも後世ごせも要らないが、せめてこうして居とうござんす。

図書 や、天守下で叫んでいる。

夫人（屹きつとなる）口惜くやしい、もう、せめて一時隙いつときひまがあれば、夜

叉ヶ池のお雪様、遠い猪苗代の妹分に、手伝を頼もうものを。

凶書 覚悟をしました。姫君、私わたくしを。……

夫人 私は貴方に未練がある。いいえ、助けたい未練がある。

凶書 猶予をすると討手の奴やつ、人間なかまに屠ほぶられます、貴女

が手に掛けて下さらずば、自分、我が手で。——（一刀を取

直す。）

夫人 切腹はいけません。ああ、是非もない。それでは私が

御介錯ごかいしやく、舌を嚙切かみきつてあげましょう。それと一所に、胆きものた

ばねを——この私の胸を一思いに。

凶書 せめてその、ものをおっしゃる、貴方の、ほのかな、口許くちもと

だけでも、見えたらばな。

夫人 貴方の睫毛まつげ一筋なりと。（声を立ててともに泣く。）

奥なる柱の中に、大音あり。――

――待て、泣くな泣くな。――

工人、おうみのじょうとうろく近江之丞桃六、むそ六十じばかりの柔和なる老人。頭巾、たつつけ裁着、火打袋を腰に、扇をあらわ使うてあ顕る。

桃六 美しい人たち泣くな。(つかつかと寄つて獅子の頭かしらを撫なで)まず、目をあけて進まぜよう。

火打袋より一挺ちようの鑿のみを抜き、双の獅子の眼まなこに当あつ。

――夫人、凶書とともに、あつと云う――

桃六 どうだ、の、それ、見えよう。はははは、ちゃんと開あいた。嬉しそくに開いた。おお、もう笑うか。誰たがよ誰がよ、あつはつはつ。

夫人 お爺様じいさん。

凶書 御老人、あなたは。

桃六 されば、誰かの櫛くしに牡丹ぼたんも刻めば、この獅子頭しじゆも彫つた、
近江之丞桃六と云う、丹波たんばの国の楊枝ようじけずり削よ。

夫人 まあ、(図書と身を寄せたる姿を心づぐ) こんな姿を、恥
かしい。

図書も、ともに母衣ほろを被かつぎて姿を蔽おほう。

桃六 むむ、見える、恥しそうに見える、極きまりの悪そうに見え
る、がやつぱり嬉しそうに見える、はっはっはっはっ。睦むつまじ
いな、若いもの。(石を切つて、ほくちをのぞませ、煙管きせるを
横銜よこぐわえに煙草たばこを、すばすば) 気苦勞の拳句は休め、安らかに
一寝入ねいりさつせえ。そのうちに、もそつと、その上にも清すずしい目
にして進ぜよう。

鑿のみを試む。月影さす。

そりや光がさす、月の光あれ、眼玉。(鑿のみを試み、小耳を傾け、

鬨ときのごとく叫ぶ天守下の声を聞く）
世は戦いくさでも、胡蝶ちようが舞う、撫子なでしこも桔梗ききようも咲くぞ。——馬鹿め
が。（呵々からからと笑う）ここに獅子ししがいる。お祭まつり礼だと思つて騒
げ。（鑿を当てつつ）槍、刀、弓矢、鉄砲、城の奴等やつら。

——幕——

大正六（一九一七）年九月

底本：「泉鏡花集成 7」ちくま文庫、筑摩書房
1995（平成 7）年 12 月 4 日第 1 刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十六卷」岩波書店
1942（昭和 17）年 10 月 15 日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、
大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：染川隆俊

2006 年 9 月 21 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。